

〈実践報告〉

日本語会話授業での「ヒューマンライブラリー」の取り組み

近藤 めぐみ<sup>†</sup> (福井大学語学センター非常勤講師)

“Human Library” Activities in Conversational Japanese Classes

KONDO, Megumi (University of Fukui Language Center, Part-time Lecturer)

キーワード：ヒューマンライブラリー、日本語会話授業、内部資源、気づき

**Keywords:** human library, Japanese conversation class, internal resources, awareness

**要旨：**「話したい」「聴きたい」という会話の必然性を生み出すことを目的に、本来は対話での相互作用を通じて偏見を減らし、コミュニティの理解を促す趣旨で行われる「ヒューマンライブラリー」を、日本語会話クラスに取り入れた。学習者が「本」や「読者」になり活動に取り組む中で、自発的で積極的な対話を実現したばかりでなく、学習者は日本語そのもの、印象や対話を変え得る要素、聞き手や話し手として大切なこと、自分自身や他者、多様性などへの多くの気づきを得た。

**Abstract:** The “Human Library” is an effective group activity, focused on dialogue and interaction, that reduce prejudice and encourage community understanding. This paper reports on the application of “Human Library” activities in Japanese conversation classes for intermediate level learners, which are aimed at creating spontaneous and active conversations. During the activities, learners actively discuss questions and answers regarding their readers and books, and they also learn how to sufficiently express their opinions in Japanese. Through these activities, learners considered Japanese usage and honorifics, became aware of the effects of verbal and nonverbal elements that can change impressions and dialogues, learned important elements as listeners and speakers, and reflected on their experiences, considering the experiences and diversity of others.

原稿受理日 (2019-10-01)

査読後掲載決定日 (2020-01-09)

日本研究教育年報. 2020, Vol. 24, pp. 109-122. ISSN 2433-8923



<sup>†</sup> 本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC BY)

下に提供します。 <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

## 1. 本稿の目的

言語学習、特に会話能力の習得において、目標言語を用いた会話時間を確保することは不可欠である。しかし、海外の日本語学習現場では、日本語で話す時間は教室内に限られてしまい、日本語を専攻としている学習者であっても、1日、1週間の大半を母語を使って過ごしている現実がある。そして、教室内でも日本語のレベル差が大きく、相手のレベルに遠慮して言いたいことを控えたり、恥じらいで躊躇したりし、なんとか日本語で自分の考えを相手に伝えようという必死さを引き出すことは難しい場合も多い。

本稿では、筆者が担当した大学の日本語主専攻3年の会話授業で「気持ちが良いインタビュー」をすることを目的に取り入れた「ヒューマンライブラリー」<sup>①</sup>の活動を取り上げ、学習者が「話したい」「聴きたい」という「話す理由」を見つけた過程を報告する。

## 2. ヒューマンライブラリーの広がり

ヒューマンライブラリーは、2000年にデンマーク・コペンハーゲンのロックフェスティバルで“Menneskebiblioteket (リビングライブラリ)”が行われて以来、世界的に広まったイベントで、名称の由来は、生きた「人」を「本」に見立てて貸し出す点にある<sup>②</sup>。

日本に最初に紹介されたのは2008年6月の朝日新聞の記事で、同年12月、ヒューマンライブラリーの前身であるリビングライブラリーがアジアで初めて開催された(横田 2018:34)。国内での活動は大学のゼミでの実施の報告が多く、地域から「本」や「読者」としての参加を求めることで大学と地域をつなぐ役割を果たしている例などもある(山下 2016)。そのほかにも、大学の地域貢献センターが主催した例(関ほか 2019)、一個人が立ち上げた市民団体(高田 2018)、日本語教師、会社員、主婦などで構成される市民活動(宮崎 2014)、市レベルで企画・開催されたもの(杉本 2018)など、様々に広がりを見せている。

ヒューマンライブラリーの日本を含む世界的な広がりも背景に、何をヒューマンライブラリーと見なすかの見解は分かれるが、坪井(2018:296)では、ヒューマンライブラリーの最大公約数として、①「生きた本」一人に対して「読者」は一人～三人程度であること、②「生きた本」の人生話は、生きにくさを含む内面の自己開示であること、③「読者」は、「生きた本」を傷つけない限り、何を聞いてもよいこと、④一回の対話時間は、おおむね三十分程度であること、の4点を挙げている。しかし、この4条件が常に満たされるわけではなく、Slivar, Vitasović, & Kostić-Bobanović (2015)ではヒューマンライブラリーをツーリズムに取り入れ、現地の人の生活それ自体の語りが観光資源となり得るとの論を展開している。生活の語りは、②の「生きにくさ」とは異なる視点である。また、Song & Wang (2010)も同様に②の条件から離れ、特定のスキルを持った人物が「本」になる活動を報告している。

<sup>①</sup> ヒューマンライブラリーを模した取り組みではあるが、日本ヒューマンライブラリー学会が定める要素(2節参照、坪井 2018)のすべてに忠実に沿っての実施ではないため、授業で実施した「ヒューマンライブラリー」には鍵括弧を付して区別する。

<sup>②</sup> Human Library Organization ホームページ <<https://humanlibrary.org/>> 2019年12月1日最終アクセス

外国語学習を主眼とした活動で、「本」は「日本語の会話スキル」「日本の文化」などの特別な能力等を持っている学生であり、日本語学習者である「読者」の学習意欲向上に役立つと述べている。また「読者」が「本」を読むとき、「本」もまた「読者」を読んでいることを指摘し、その対話が双方向的なものであることを示唆している。

国内の言語教育の場では、宮崎（2015）が留学生対象の応用的な日本語能力の取得を目的とした実践例がある。「本」は義足生活者、難病患者などのマイノリティーで、坪井（2018）の②の条件を満たしたものである。「読者」の日本語レベルは N4～N1 合格まで幅広く、実施を通し、教師の視点から、日本語については「ほとんどが単語や一文だけではなく、複数の文による回答をしていた」「限定的な言語環境で行わなければならなかったことは通常の HL 以上に伝えられた際の喜びをもたらし、不自由な言語環境は伝えたい情報をより明確にさせた」等が報告されている。

坪井（2018）の②に関し、本稿で取り上げる活動では、「本」の人生話が「生きにくさ体験を含む」ことは絶対とせず、Song & Wang（2010）と同様に外国語学習を主眼とするが、その内容は指定しない。課したのは「自分しか語れない話」で「本」になることである。実施に際し、Slivar, Vitasović, & Kostić-Bobanović（2015）の現地の人の語りが観光資源となるという視点を受け、様々な地域、家庭環境などで培ってきた大学 3 年生の 20 年の人生話は、その一つひとつが人を惹きつける「本」になり得る教室の内部資源であり、Song & Wang（2010）で「本」もまた「読者」を読むと述べているように、活動を通して学びを得るのは「本」「読者」の両者であるという視点に立ち、すべての学生が「本」「読者」なることで、教室内で「ヒューマンライブラリー」活動を完結させる。

### 3. 対象クラスと授業目標

対象クラスはタイの学士課程の日本語主専攻 3 年の会話前期クラスである。主専攻学生は学部入学時点で日本語既習者であり、1 年次は 2 時間×15 回の会話授業を前後期 2 コース、2 年次は 3 時間×15 回の会話授業を前後期 2 コース受けており、3 年前期時点での日本語力は JLPT N3 から N1 取得後 3 年以上経っている学生までさまざまだが、3 年修了時に上級到達を目指している。3 年会話履修者は 36 人で、18 人ずつ 2 クラスに分けて同じ時間帯に実施した。

会話授業は「聞く」「話す」「やりとり」の目標が設定されており、「やりとり」については、①相手が言っていることを受け入れ、またそれをまとめながら（双方向）インタビューができる、②ある程度まとまった形でインタビューに答えられる、という 2 つの目標が、「話す」には、①見たり聞いたりしたことが描写、叙述、説明できる、②事実について説明できる、③意見が言える等、6 つの目標がある。インタビュー課題については、教室外での日本人に対するインタビュー、クラス内でのインタビュー等を設定したが、インタビューを受ける側を語ろうと思わせる内容の質問事項の用意が難しく、自発的な双方の会話を促す場としてはさほど機能せず、日本語が不得意な学生は積極的に質問をしないなどの課題があった。

#### 4. 授業の流れ

会話授業は3時間×15回だが、試験や発表を含むため、教室活動は11回である。教室活動は表1に示すような流れで進め、「ヒューマンライブラリー」は11回目の最後の教室活動日に行った。また、2～10回目には、表1に示した活動に加え、各回、1分スピーチと雑談のことば、敬語の使い方の時間をとった。

表1 会話授業の教室活動の流れ1～10回目

1回目	授業説明、プレゼンテーション計画（マンドラート使用）
2～4回目	性格や特徴の説明・描写
5～6回目	町・場所の様子説明・描写
7回目	学期末へ向けて；「ヒューマンライブラリー」とプロジェクトの計画、相談
8～10回目	意見交換（ピンポンディベート、ディスカッション）、グラフを使った発表の練習

#### 5. 「ヒューマンライブラリー」に向けての準備

3年次の会話授業を始めた時点では、受講者の大半はヒューマンライブラリーの「本」や「読者」として求められるような長い話やその理解、的確な質問等をする力、印象の良いことば遣いやふるまいなどを、身につけられていない。そのため、それらの不足を補うため、会話授業での「ヒューマンライブラリー」実施に向け、以下の課題に取り組んだ。

##### 5-1 会話の大意をつかむ

話し手、聞き手がお互いの話している内容の意味を理解できなければ、対話は成立しない。そのため、話し手が何を言おうとしているのか、話の核を失うことのないよう、授業外で会話の聴解を毎回課した。1回の聴解の宿題では30秒～1分程度の短い会話を2～3本取り上げている。先生、ホームステイ先、部活など、場面や相手、ことばのスタイルは様々なものを対象とした。宿題の質問は「何が有名」「なぜ大切」などの簡単なものを1本の会話につき3つ程度出しているが、受講生は平均で3回ぐらい聞かないと答えられないと話していた。

##### 5-2 その場で話す力

「ヒューマンライブラリー」は、本のあらすじ（6-2項、図3参照）をもとに開始されるため、はじめの段階では質問の予想はつき、ある程度の準備はできる。しかし、時間が進むにつれ、その場で対処しなければならない質問の割合が増えてくる。そこで、頭の中に浮かんだことをその場で話す練習として、事前の教室活動では1分スピーチ、ピンポンディベート、グループディスカッションを課した。

1分スピーチは10回までの授業で1人2回、各回4名程度の担当者が教室前でスピーチトピックを引き、30秒後に1分のスピーチを開始するという活動である。スピーチトピックは1回目の授業で学生から希望を集め、「2年生での最高の記憶」「憧れの人物」「今、何かを一

つ捨てるなら？」など 79 のトピックが得られ、1 回出たトピックは 2 度と使わないというルールで進めた。

ピンポンディベートは 6 人で「高校生はボランティアをすべきか」「日本に旅行するなら夏か冬か」などのテーマに対し、3 対 3 の A グループと B グループに分かれてグループで意見を固定し（図 1）、前の人の意見への反論と自分の意見を一分以内で話していく形

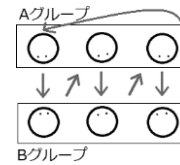


図 1 ピンポンディベートの発言順

で進めた。この活動では 1 つの話題は 6 人を 2-3 周りしたら別のテーマへ移るようにした。

グループディスカッションでは、「宇宙人はいるか」「動物園の動物と野生の動物はどちらが幸せか」などのトピックで、司会 1 名、参加者 5 名の 6 名で、1 回 20 分程度のディスカッションを行った。参加者の発言の種類は賛成、反対、情報提供、質問など、自由とした。

### 5-3 まとまった内容を話す力

事前準備が必要な 2 分のプレゼンテーション 2 本と自分の長所短所の 2 分説明を課した。1 本目のプレゼンテーションのテーマは「私の○○」または「○○と私」で、2 週目～6 週目までの授業で 3 人ずつ程度順に発表をした。マンダラート（図 2 参照）<sup>③</sup>を書いてイメージをふくらませたものをアウトライン化し、それに沿って発表をした。発表タイトルは「野良猫と私」「撮影と私」「私の折り紙」などであった。

夏休み	蚊	キュウリ	ハッソル	水着	島	釣り	刺身	きれい
山	夏	冬	旅行	ビーチ	BBQ	南の海	魚	水族館
ヒマワリ	雨	青空	日光浴	熱い	ホテル	おいしい	養殖	熱帯魚
フェリー	ヨット	釣り	夏	ビーチ	魚	夏祭り	正月	思い出
移動	船	島	船	海	花火	庭	花火	駄菓子屋
川	ボート	ロープ	砂浜	山	台風	友達	夜空	赤
白い	かめ	かた	登山	木	紅葉	被害	雨	ニュース
カガール	砂浜	子ども	果物	山	富士山	土砂	台風	天気図
南	ヤドカ	砂風呂	ロープウェイ	山小屋	滝	川	逃げる	地震

図 2 マンダラートの例（「海」）

2 本目のプレゼンテーションは「好きな場所」または「思い出の場所」の発表で、教室活動で町の説明の例などで練習を重ねた後、発表の構成を自分で考え、6 回目の授業で全員が発表をした。自分の長所短所を話す課題では、自分の性格を含む自己紹介の聴解をウォーミングアップとし、友達との話し合いや占い、自己評価などで自分の長所短所を教室内で考えたあと、4 人程度のグループで話す練習をした。徐々に時間のコントロールもし、2 分で長所短所の背景にあるエピソードを含め、留学や就職の面接試験で使えるものを目指し、発表をした。

### 5-4 相手への配慮

授業開始時点で受講生の大半は中級～中上級レベルであり、ですます体を頻繁に使う。3 年会話のやりとりでは「場面に合わせたスピーチレベルが選べる」スキルの習得も必須とされている。「本」「読者」それぞれへの敬意を示すため、毎回の授業で 2 人ペアで敬語発表担当

<sup>③</sup> ①マンダラートの中央にテーマとなるキーワードを書く。②キーワードの周りの 8 マスに思いつくことばを入れる。③②で書いた 8 つのキーワードを周りの 3×3 マスの中心に書き、同様に思いつくことばを書く。④それぞれのことばを組み合わせたか、全体から思いつくアイデアで思考の手助けをする。

を決め、敬語の仕組みや敬語でのやりとりを1回10分程度で復習する時間を設けた。発表で取り上げられたのは「簡単な挨拶」「相談を受ける」「お願いする」などの場面である。

## 6. 「ヒューマンライブラリー」の進め方

### 6-1 ヒューマンライブラリーの説明と「本」について

ヒューマンライブラリーの概要を対象の2クラス合同で説明し、自分なら何の本になれるかを考えるためにマンダラートの例を示し、学生は手書きのマンダラートを使って授業内で考える時間をとった。その2週間後に、筆署名、書名、「本の帯に書けるぐらい」の短い本の紹介（あらすじ、箇条書き、目次など）の提出を求めた。その際、筆署名は自分の名前を避けることを求めた。インタビューが「〇〇さんの意外な話」ではなく、「◇◇経験者の話」となるように、いつもの教室活動に変化をつけるため、呼び方から変えることとした。

### 6-2 「本」と「読者」の組み合わせ

受講生から集めた書名やあらすじ等を加工し、図3のような本のリストを、授業で用いている共有フォルダ内のファイルで見られるようにととのえた。筆者と書名は打ち直したが、あらすじ等は画像をそのまま貼り付けており、日本語の訂正などは一切していない。



図3 本のあらすじ (抜粋)

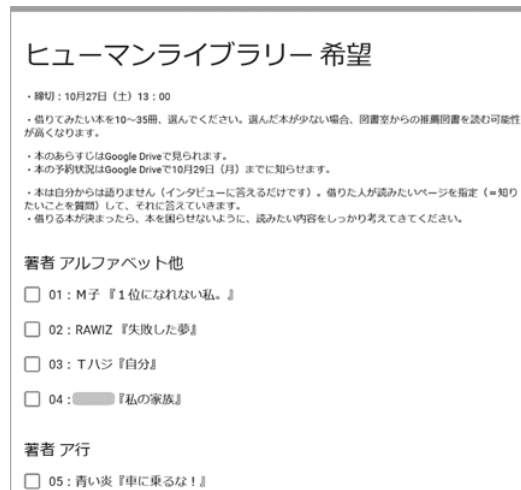


図4 読みたい本の希望 (抜粋、一部加工済<sup>(4)</sup>)

<sup>(4)</sup> 図4、表2~3では、個人情報にかかわる部分を灰色で塗りつぶしている。また、日本語は誤りも含め、学習者の表記をそのまま載せている。

その後、Google Form を用いて、図 4 に示すようなフォーマットでどの本を借りたいかの希望を授業外で出すよう求めた。そして実施日には、「ヒューマンライブラリー」4 ラウンド中、3 ラウンドで「読者」になるうち、2 ラウンド分の 1 冊目の本を、学習者が提出した希望の「本」の中から教員が組み合わせを考え事前予約をし（表 2 参照）、実施の 1 週間前に示した。また、各学生の 4 ラウンドでの動きを表 3 のように確認した。

表 2 本と読者の組み合わせ（抜粋、一部加工済）

第 1 ラウンド 9:50~10:20	第 2 ラウンド 10:30~11:00
<p>509 教室</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Book 14 ショート・ラテ 『留学生の従業員から見たカフェの空間』 ○予約：[ ]、[ ]</li> <li>Book 17 春夏秋冬『音楽には国境がない。』 ○予約：[ ]、[ ]</li> <li>Book 23 灰色子 『いじめっ子の私ーいじめっ子から助けてくれた友達をついに助けてくれた私ー』 ○予約：[ ]、[ ]</li> <li>Book 24 裸のしゃかえん『スーツに抱き寄せられた社会』 ○予約：[ ]、[ ]</li> </ul>	<p>509 教室</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Book 02 RAWIZ『失敗した夢』 ○予約：[ ]、[ ]</li> <li>Book 15 木の上の猫『小さなわたしと異国』 ○予約：[ ]、[ ]</li> <li>Book 21 天王星『我輩はファンクラブである』 ○予約：[ ]、[ ]</li> <li>Book 26 ビーティー『間違っただけに学んだこと』 ○予約：[ ]、[ ]</li> <li>Book 31 マツキ『うつ病者の友達 ダイアリー』 ○予約：[ ]、[ ]</li> </ul>

表 3 各学生の第 1~4 ラウンドでの動き（抜粋、一部加工済）

第 1 ラウンド 9:50~10:20		第 2 ラウンド 10:30~11:00		第 3 ラウンド 11:10~11:40		第 4 ラウンド 11:50~12:20	
教室	予約状況 (1 冊目に読む本)	教室	予約状況 (1 冊目に読む本)	教室	予約状況 (1 冊目に読む本)	教室	予約状況 (1 冊目に読む本)
1	お好みの本をどうぞ	510	ルーナー『日本語専攻の苦労』	509	【本】	509	M子『1 位になれない私。』
2	509 【本】	509	ビーティー『間違っただけに学んだこと』	509	お好みの本をどうぞ	510	インターネットカホー『小学校 5 年生で留年した男』
3	509 【本】	509	木の上の猫『小さなわたしと異国』	509	お好みの本をどうぞ	510	バチカネー『中学一年生の目から見たカリフォルニア』
4	510 まりん『友でライバル』	510	江戸山はな人生初の号外で二級取った留学生』	509	お好みの本をどうぞ	509	【本】
5	510 橙色の雲『スイーツの話』	509	お好みの本をどうぞ	509	【本】	509	ア江路『顔のない幽霊』
6	510 ビじ美人『初めて学校の教師になった』	509	お好みの本をどうぞ	509	【本】	509	ア江路『顔のない幽霊』
7	509 ショート・ラテ『留学生の従業員から見たカフェの空間』	509	お好みの本をどうぞ	509	【本】	510	インターネットカホー『小学校 5 年生で留年した男』
8	お好みの本をどうぞ	510	おひつじ『学校行かないの？』	510	闇倫『1 か月、病院のベッドで』	509	【本】
9	509 【本】	509	天王星『我輩はファンクラブである』	509	6 年間女子校で育った女子高生と女子校』	509	お好みの本をどうぞ
10	510 ビじ美人『初めて学校の教師になった』	509	【本】	510	インディゴ『4 ヶ月の苦労』	510	お好みの本をどうぞ
11	509 【本】	509	天王星『我輩はファンクラブである』	509	お好みの本をどうぞ	510	中本・ユヅ子通訳のアリバイトの経験』
12	509 【本】	509	お好みの本をどうぞ	510	インディゴ『4 ヶ月の苦労』	510	バチカネー『中学一年生の目から見たカリフォルニア』
13	509 春夏秋冬『音楽には国境がない。』	509	【本】	510	妻人に会ってしまった日本留学生一年留学で日本人の友達一人もできなかった一つの理由』	509	お好みの本をどうぞ
14	509 裸のしゃかえん『スーツに抱き寄せられた社会』	509	【本】	510	お好みの本をどうぞ	510	ひかる『学生にもできる翻訳のアリバイト』

### 6-3 「本」「読者」としての心構え

「本」には「読者」がわかるが、「読者」には「本」が誰かあやふやな状態で実施日を迎える。実施日 1 週間前の組み合わせ発表と同時に、「読者」には、当日は何でも知りたいことは聞いていいが、「本」を傷つけることはせず敬意を払うこと、「本」が自分から語り始めるのではなく、「読者」の質問に答える形でインタビューが進行していくことを確認した。また「本」に対しては、自分が話してよい内容で「本」になるはずだが、踏み込まれたくない部分については「そのページは破れています」のように回答を回避してかまわないことを

伝えた。なお、確認できた範囲で「本」がページ破損を理由に読者の求めに応じなかった例は1例で、「双子にも個性があり、尊重してほしい」という内容の『双子のメンタリティー』で双子の写真の提示を求められた際に起きた。実施後に「本」は「本を傷つけるような読者はいなかった」、「読者」は「写真のページが破れていて残念だった」と回答している。

#### 6-4 実施当日

180分の授業を4つに区切り、4ラウンドに分けて実施した。表3に示したように、4ラウンドのうち、1ラウンドが「本」になる時間、2ラウンドが1冊目は予約していた「本」を読みに行く時間、残りの1ラウンドが会場の「本」を自由に読みに行く時間である。「ヒューマンライブラリー」開始前にコメントシート(図5)と振り返りシート(6-5項参照)の配付・説明をし、各ラウンド間の10分でコメントシートに記入するよう指示した。また、教室前にはその時間に教室にどのような「本」があるかを掲示した。

<p>3年会話前期 ヒューマンライブラリー 2018.10.31</p> <p>印象に残った本 _____ さん</p> <p>『 _____ 』</p> <p>印象に残ったこと</p>	<p>3年会話前期 ヒューマンライブラリー 2018.10.31</p> <p>印象に残った読者 _____ さん</p> <p>印象に残ったこと</p>
---	---

図5 コメントシート(左:本に対して、右:読者に対して)

#### 6-5 「ヒューマンライブラリー」の振り返り

「ヒューマンライブラリー」当日の実施前に配付した振り返りシート(A4片面1枚)は、授業後に提出を求めた。記入項目は以下の6点である。

##### 「読者」として

- 質問1. インタビューに向けて、どのような準備をしたか  
 質問2. 互いにとって気持ちのよいインタビューになるよう、どのようなことを心掛けたか

##### 「本」として

- 質問3. 本を傷つけるような読者はおらず、丁寧に扱われたか。また、読者に求められているページが何かをしっかりと把握し、読者の期待に応えられたか  
 質問4. 印象に残っているやりとりはあるか

##### 全体を通して

- 質問5. ほかの読者と本が話しているのを見聞きし、学んだこと、気がついたことはあるか  
 質問6. 今回の活動を通し、インタビューに必要なことは何だと思うか



## 7. 「ヒューマンライブラリー」の意義

### 7-1 会話クラスの教室としての会場の様子

本当に真剣に、悩みにも苦勞にも笑いにも、それぞれの「本」の一つひとつの経験や感情に真摯に向き合っているのが印象的だった。同一母語のクラスであり、意思疎通を優先しタイ語での会話が生じるのではという危惧もあったが、ひたすらに日本語で伝えよう話そう、教えてもらおうという姿勢が見られ、話す上での普段の恥じらいや躊躇は必死さにかき消されていた。「本」や「読者」がことばに詰まる場面はあっても、それが感情的なものであれば周囲がそれを支え、日本語によるものであれば、ほかの「読者」も含め、互に通じ合おうとするひたむきさを感じた。これは、普段の仲の良さにかかわらず、今まで話をしているのを見たことすらない学生が肩を支えていたり、留学帰りで学年が違う学生が別のクラスの下学年の学生と2人で話し込んでいたり、教室のいたるところで見られる光景だった。

各ラウンドの間に10分間の休憩をとったものの、30分では話が尽きず、間の10分も席を立たず、日本語での会話が続行されていた。授業後に隣のクラスの教員をつかまえて、「ずっと悩んでいたけれど、『これでいい』と思えるようになりました」と話しに来る学生もいた。親の反対の中、ピアノ奏者を目指して音楽学校を受験したものの失敗し、その後、総合大学を受験、進学して3年になるが、「逃げた」と思って苦しんでいたとのことだった。

### 7-2 印象に残った「本」と「読者」

図5左に示したコメントシートで、印象に残った「本」に返すコメントを求めたところ、「本」の感想や評価、自分との関連など、表4に示すようなコメントが出た。「説明が詳しい」といった評価的なもののほか、驚きや考えさせられるもの、楽しさなど、実際の本のように、「ヒューマンライブラリー」の「本」からも「読者」が様々な経験をしたことがわかった。また、「読者」に対するコメントシート(図5右)には表5のようなコメントが書かれていた。「本」に対するコメントよりは種類が少なく、質問に対するものが多かった。数多くの質問をした「読者」は印象に残りやすかったようである。「本」への気づかいを見せ、「本」から「私の気持ちをも気になったりしてくれて、よかった」というようなコメントがある一方で、「知りたいことは何でも聞く」ことにより「自分の知りたいことを全部私に聞くので、語りやすくなりました」というように、正反対の読み方をしていてもどちらも「本」は好意的にとらえており、読み方の正解は「本」一冊一冊によって異なることを身をもって学ぶ経験になったのではないだろうか。日本語による視点については7-3節で述べる。

表4 印象に残った本<sup>⑤</sup>

① 感想	
おもしろい(35)	・このインタビューを通して初めて知ったこともあって面白かった
感動的(10)	・本当に感動しました。とても悲しかったが思い出がありました。
悲しい、大変な話(15)	・聞いていただけで悲しくなりました。
② 本の内容	
〇〇の印象が変わった、驚いた(14)	・女子校こわいと思いました
本の話した具体的内容の記述(12)	
③ 本への評価	
説明が詳しく、イメージできる(68)	・具体的にしたり、会ったりしたことをせつめいした
自分の気持ちを丁寧に伝えた(26)	・大切な場所を失った悲しみをよく伝えられた
わかりやすいやさしいことばで話した(11)	・簡単な言葉を使っていて、とても分かりやすかったです
どんな質問にも答える(5)	・たとえこの話はちょっと言いつらくても、よく言っていた
雰囲気がいい(15)	・話しているときの雰囲気がとても楽しかった
④ 本に対して	
どんな経験も(本の)今につながっている(8)	・いじめという悪い経験が今明るくてとても笑えるようになっている
応援したい(5)	・大変なけいけん、よくがんばりました。おうえんしています!
本のことをもっとわかるようになった(3)	・自分の人生が「地味」だと言ったが実は別の世界で楽しんでいた
⑤ 自分との関連	
同じ関心、経験がある(8)	・子どものころの話があつて自分に以ているなと思いました
本の経験が(読者の)勉強になる(12)	・いいけいけんも悪いけいけんもあつて、勉強になりました
自分も経験した気持ちになった(12)	・聞くだけで一緒に行ってきたみたいで楽しかったです
⑥ 自分の気持ち	
いつまでも聞いていたい(4)	・時間が是なかつたので、あとにもっと聞きます
自分もしてみたい、一緒にしたい(6)	・一緒にホラーゲームをやりたいなあとと思います
考えさせられる(3)	・ひどい <sup>か</sup> ご <sup>な</sup> の <sup>に</sup> れい <sup>せい</sup> に見えました。とても考えます。

表5 印象に残った読者

① 準備	
周到な準備(8)	・あらずじに <sup>では</sup> 分からない所ともっと知りたい所を質問した
② 質問に対して	
たくさん質問をした(34)	
話したい質問をした(13)	・私がちょうど話したいことを聞いてくれて、本当にありがとうございます
おもしろい質問をした(10)	・自分の知りたいことを全部私に聞くので、語りやすくなりました
深い内容について質問した(8)	・深いこと、考えさせることを聞いてよかったです
③ 聞き方、様子	
真面目に聞き、興味を示した(27)	・あまり詳しくなさそうで分からなそうだが、まじめに <sup>かたり</sup> 語を聞いてくれた
雰囲気、話し方がいい(14)	・やさしくゆっくりと尋ねていて、〇〇さんと話すときに、非常に安心した
本への気遣い(1)	・私の気持ちをも気になったりしてくれて、よかったです
ずっといてくれた(4)	・最後まで聴いてくれて、感謝しています
④ 意見、関心	
アドバイスをくれた(4)	・質問をするだけでなく、本(私)におすすめてくれました。
意見を交換できた(2)	・〇〇さんは大変な生活と思ったけど私にとってそんなに大変ではなかった
反応を示してくれた(14)	・「さびしい」や「かなしい」を言ってくれました
⑤ 共通点	
自分と同じ経験があつた(2)	・同じの経験者なので、もっと気楽にさせて、感動しました
意外な共通点があつた(1)	・〇〇のことも知っていたのでびっくりした

<sup>⑤</sup> 表 4~6 右側の箇条書きは学生コメントからそのまま抜粋。ただし、わかりにくい箇所は筆者がルビを補った。また、表内左側の丸括弧の数字は回答数。

## 7-3 振り返りシートから見る「本」と「読者」の対話の効果

「ヒューマンライブラリー」の活動は、「気持ちのいいインタビューをする」ことを趣旨に実施したが、活動を通して受講生が得たものは「インタビューをする」という以上のものである。6-5項で示した6つの質問に対する振り返りシートから、「ヒューマンライブラリー」を通して受講生は表6に示すような、①日本語に対する気づき、②印象や対話を変え得る要素、③聞き手として大切なこと、④話し手として大切なこと、⑤自分自身への気づき、自己開示、⑥他者、多様性への気づき、⑦他者からの気づき、学び、⑧活動そのものを楽しむ、といった気づきを得るという作用があったことがわかった。

表6 「本」と「読者」の対話の効果 (抜粋)

① 日本語に対する気づき	
[長く詳しく話せる]	・自分の体験について話したら、とても長く、詳しく説明できるということです
[難しい話もできる]	・自分かわからないことばがあるとむずかしい話を話したいなら、よく説明をすると、読者がわかるようになると学びました
[敬語の使い方]	・他の読者の質問に聞いて、敬語の使い方をもっと分かるようになった
[前置き表現]	・前置き表現を使うこと、そんな表現にあまりなれていないから、使わないが、インタビューにはそういう表現を使うといい印象が残るのではないかと気がついた
② 印象や対話を変え得る要素	
[真剣さ、あいづち]	・やはり、真剣に自分の本を聞いてくれるのを見ると、とても嬉しく感じます。ちゃんと目を見て、あいづちを打ち、 <sup>うな</sup> づいてくれることで、「ああ、ちゃんと興味もってくれてるんだな」と思います。言葉だけがコミュニケーションではないんだと再確認できた瞬間でした
[質問意図や反応]	・本の内容や対応はもちろん、読者の質問の意図や本への反応もとても大切であり、必要なことだと感じました。読者の対応により、どれだけ本が安心して心を開き、内容を伝え質問に答えてくれるか、どんなインタビューになるかわ変わってくると思います
[わかりやすさ]	・丁寧にわかりやすく話すことが一番大切だと思います。聞き手にしても、話し手にしても、言いたいのが相手に伝えることができなければインタビューではなくなると思うからです。
[声の大きさ]	・声の大きさが大きい小さいかによって読者の興味の程度が変わること
[遠慮と気づかい]	・遠慮と気づかいが必要だと思う
[座り方]	・いい印象を与えるには、座る姿勢から練習したほうが良いと気づきました
③ 聞き手として大切なこと	
[マナー]	・あまり聞かせたくないことがあったら、その話について本にしつこく聞かない ・本が話しているとき、よく聞いて、ほかの読者としゃべらない
[距離感]	・敬語で丁寧に話して、言葉使いなどに気をつけてる反面、あまり冷たい印象にならないよう、なるべく場の雰囲気や和ませながら緊張しすぎないようにすることが互いにとって気持ちのよいインタビューになると思っています
[内容把握と聞き方]	・相手が話している内容を把握し、より深く掘り下げられるような聞き方をすること

---

④ 話し手として大切なこと

- [ことば選び] ・相手が分かる言葉だけを使うこと
  - [話の流れ] ・(話が)脱線しないように、質問に簡潔に答えること
  - [非言語要素] ・話をしている時に読者の目を見たり、トーンを変えたりすると気持ちが伝わってくる
  - [前置き表現] ・相手の質問をしっかり聞いて、自分の体験したことや感想を言葉にすることです。相手が想像できるようにしっかり話します
  - [詳しい説明] ・表面的な質問の答えで読者が勘違いすることがあったので、できるかぎり自分から読者を勘違いさせないように、情報を補足した
  - ・ある質問に対して答えたとき、答え終わったらある読者が自分の解釈をもとにして次の質問をした。考えてみたら、やはり自分が伝えたいことを1、2回の質問で言い切れなかった。その質問から、読者が勘違いしていることを分かって、その後の質問からはより詳しく答えるようにした。
- 

⑤ 自分自身への気づき、自己開示

- [隠れていた話題] ・「オーケストラ」というももとのトピックからそれ以外に他の楽器の話になったときのやりとりでした。しかし、別の話になってしまったということではなく、それはあらすじには書いていなく本の中に隠れているページがあることと気がつきました。
  - [自己開示] ・かなり傷つきやすいトピックなので、昔のことに対する今の気持ちが聞かれた時は、答えにくかったが、やっと言えてよかったですと思います
- 

⑥ 他者、多様性への気づき

- [人それぞれ] ・みんなは、自分の好きなこと、なやむこと、自分だけがある経験があります
  - [話すスタイルの違い] ・違う本は違う話すスタイルがあるので、質問のスタイルも変えた方がいい
  - [質問の多様性] ・気がついたのは最初に読者の用意した質問がたいてい同じで、ときどきほかの読者の用意したものと重なっていたことです。しかし、どんだん話を聴いて、質問は一人一人の読者の知りたいことによって異なるようになったのです。
- 

⑦ 他者からの気づき、学び

- [互いの尊重] ・皆さんは自分の辛いことがあると気がついたし、またお互いに気持ちが気をつける質問を聞いた方がいいと思っています
  - [前向きになる] ・ある本がひどい目にあったが、悩んで落ち込んだより楽観的に考えて、その経験を勉強に、前向きすることが大事と学んだ
  - [自分も頑張ろう] ・みなさん、うけごたえがとともよくて、内容も奥深く興味深いものが多くありました。自分ももっと頑張ろうという気持ちになりました。
- 

⑧ 活動を楽しむ

- [予想外の質問] ・予想外の質問をされて、それに答えるのが面白かった
  - [人間関係] ・普通のときより、このインタビューで仲良くなる人がいた
- 

①の日本語に関しては、自分も相手も思っていた以上に詳しく話せること、難しい話もきちんと説明したら伝えられる力がすでにあるといった気づきを得たことで、普通の授業で感じていた限界は実は自分で決めていたのだと知り、伝えようとする意志を持てるようになるだろう。また、対話の相手がやさしくわかりやすい日本語で話してくれたことで話が続けやすかった、スムーズに進められたという意見もあった。このやさしくわかりやすい日本語は意識的な面もあり、また、相手のことを知りたい、意見を聞きたいという必死さからだど

り着いたものでもある。母語ではことば選びで迷って口に出せない質問ができたという側面もあるかもしれない。また、「敬語」に関する指摘も多く、友達でも敬意を示せた、普通体で話しているグループでは話が盛り上がっていた、というようにことばによる距離感の違いを学ぶ場にもなった。1冊の「本」、一人の「読者」であっても相手の質問内容に合わせてことばの丁寧さを変えたとの反省もあり、相手との関係だけではなく、話の内容や雰囲気によってもことばのレベルを変える必要性を身をもって知る機会となった。

そして、②の印象や③④の聞き手や話し手としての気づきに示したように、対話で大切な要素は、自ら対話をする中で学び取っていけることがわかった。これは、例年実施してきたインタビューでは得られなかった成果である。これは、インタビューされる側が聞いてほしい内容を設定したことで「話したい」という意識が生まれ、読みたい「本」に向き合う「読者」の質問により「話す理由」が見つかり、「話したい」「聴きたい」という双方の欲求が満たされ、「気持ちが良いインタビュー」が実現したことで得られたのではないだろうか。なんとか自分の話を相手に届けようという必死さを、学習者同士が、そのやりとりから導けた活動であったと思う。また、⑤～⑦のような自分や他者へ、また、他者からの気づきも普段の教室活動の中では得難いものであり、後期以降の教室活動の活性化につながった。

## 8. 教室にある内部資源の活用を

本稿では海外の会話授業で実施した、「気持ちが良いインタビュー」をすることを目的に取り入れた「ヒューマンライブラリー」の活動を取り上げた。「ヒューマンライブラリー」実施は、学習者が「話したい」「聴きたい」という「話す理由」を求めるための試みであったが、3時間の活動の中で、学習者は①日本語に対する気づき、②印象や対話を変え得る要素、③聞き手として大切なこと、④話し手として大切なこと、⑤自分自身への気づき、自己開示、⑥他者、多様性への気づき、⑦他者からの気づき、学び、⑧活動そのものを楽しむ、といったように非常に多くのことを得ている可能性が示唆された。

今回の実践は海外の会話クラスでの報告だが、ヒューマンライブラリーの趣旨でもある「多様性への気づき」などの視点に立ちかえれば、日本語会話の教室の中で考えたとき、日本国内の教室でこそ求められる要素かもしれない。特に留学生センターなどでは1年程度の各国からの短期留学の学生が一堂に会する。習慣、宗教、食、といった一人ひとりの根本的な常識も違う学生が集まったとき、「どこまで聞いてよいのか」という距離感はつかみがたい。そうした学生同士をつなげる意味でも、「話したい」「聴きたい」という要素を結集させた「ヒューマンライブラリー」の実施は深い意味を持たせられるのではないだろうか。教室の活性化に、「ヒューマンライブラリー」という選択肢を数えられたらと思う。

## 参考文献

- 杉本雄祐 (2018) 「地域福祉を考えるきっかけとして—立川市社会福祉協議会流のヒューマンライブラリー」坪井健・横田雅弘・工藤和宏編著『ヒューマンライブラリー—多様性を育む「人を貸し出す図書館」の実践と研究』 pp.124-134、明石書店
- 関久美子・岩森三千代・池宮真由美・佐藤裕紀 (2019) 「ヒューマンライブラリーの実践と学生への教育効果：多様性の理解を目指す試みとして」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』 49: pp.25-41
- 高田光一 (2018) 「誰でも参加しやすい生きている図書館を目指して—ブックオブ・リーフぐりーんの取り組み」『ヒューマンライブラリー—多様性を育む「人を貸し出す図書館」の実践と研究』 pp.110-121、明石書店
- 坪井健 (2018) 「自己と他者の関係性の再構築—HL の対話の可能性をめぐって—」『ヒューマンライブラリー—多様性を育む「人を貸し出す図書館」の実践と研究』 pp.294-330、明石書店
- 宮崎聖乃 (2014) 「多文化共生社会を目指す取り組みとしてのヒューマンライブラリー：市民活動としてのヒューマンライブラリー実践報告」『長崎外大論叢』 18: pp.185-200
- \_\_\_\_\_ (2015) 「留学生を対象とした日本語科目におけるヒューマンライブラリーの試み：実践報告」『長崎外大論叢』 19: pp.131-142
- 山下美樹 (2016) 「学生の汎用的能力向上を目的とした大学と地域を繋ぐアクティブラーニング・ゼミプロジェクト：『ヒューマンライブラリー』実施の振り返り」『麗澤大学紀要』 99: pp.85-89
- 横田雅弘 (2018) 「ヒューマンライブラリーの可能性『読者』（来場者）と『司書』（学生）の学びを中心に」『言語文化教育研究』 16: pp.33-44
- Slivar, I., Vitasović, A. & Kostić-Bobanović, M. (2015). The Human Library Initiative as an Experience-based Tourism Product. *Dubrovnik International Economic Meeting* . Pula, Croatia: 2 (1), 865-879
- Song, X. & Wang, J. (2010). Research on Foreign Language Learning Model Based on Human Library. *Journal of Academic Libraries*. Beijing, China: 2010-4, 27-30